

小学校 外国語活動 部会

部会長 大任小学校 校長 杉原 哲彌
実践者 糸田小学校 教諭 仲野 愛海

1 研究主題

積極的にコミュニケーションを行う外国語活動の在り方
～目的に応じて表現を選ぶ状況設定を通して～

2 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

社会や経済のグローバル化が急速に進展し、異なる文化の共存や持続可能な発展に向けて国際協力が求められるとともに、人材育成の面での国際競争力も加速していることから、学校教育において外国語教育を充実することが重要な課題の一つになっている。社会のグローバル化はますます進展していくことが予想され、人・モノ・情報がダイナミックに往還する中で世界を意識しないで生きていける時代は終わりつつあるといえる。最近では自分自身が外国に出て行かなくても、外国人の増加により日本国内においても異言語・異文化間のコミュニケーション能力の必要性が高まってきている。そのような社会の変化に伴って、従来の英語教育を見直し、コミュニケーション能力の向上を目指した外国語教育の改革を求める気運が高まってきた。

さらにこのような状況の中、外国語教育は中学校から導入される学習であったが、聞くこと及び話すこと、読むこと及び書くことの4技能を一度に取り扱う点に指導上の難しさがあるとの指摘があった。現代社会の変容と、外国語教育入門期の課題を踏まえれば、小学校段階で外国語に触れたり、外国語を使って体験したりする活動を設定することは、中・高等学校における外国語教育の基盤となるとともに、将来におけるコミュニケーション能力の育成に役立つと考えられる。

(2) 外国語活動のねらいから

外国語活動の目標は、コミュニケーション能力の素地を養うことにあり、①「外国語活動を通じて、言語や文化について体験的に理解を深めること」、②「外国語を通じて積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ること」、③「外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませること」の3つの柱からなる。

これら3つの柱は中央教育審議会の答申の中の「小学校段階における外国語活動」の中で具体的な性格が述べられている。それは「小学校段階では、小学生のもつ柔軟な適応力を生かして、言葉への自覚を促し、幅広い言語に関する能力や国際感覚の基盤を培うため、中学校段階の文法等の英語教育を前倒しにするのではなく、国語や我が国の文化を含めた言語や文化に対する理解を深めるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ることをも目標として、外国語活動を行うことが適当と考えられる」こと、また「外国語活動を行うに当たっては、身近な場面やそれに適した言語や文化に関するテーマを設定し、ALTの活用等を通して、英語でのコミュニケーションを体験させるとともに、場面やテーマに応じた基本的な表現や単語を用いて、音声面を中心とした活動を行い、言語や文化について理解させることを基本とすることが適当である。なお日本語とは異なる

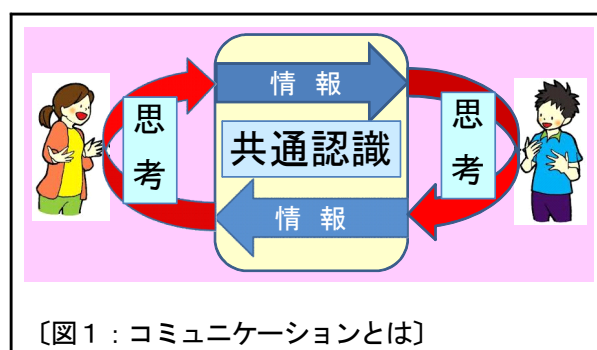
る英語の音声や基本的な表現に慣れ親しませることは、言葉の大切さや豊かさ等に気づかせたり、言語に対する関心を高め、これを尊重する態度を身につけさせることにつながるものであり、国語に関する能力の向上に資するものと考えられる」ことである。

このように、小学校外国語活動で目指しているものは、単に「話すこと」「聞くこと」のスキル面を向上させるものではない。子どもたちの大きな課題の1つであるコミュニケーション能力の向上と、言葉の大切さや豊かさ気づかせること、そして日本文化を中心に国際理解面について体験を通して具体的に気づかせようとするものである。これらのことから外国語活動においてコミュニケーションのよさを味わわせることは意義深いと考える。

3 主題の意味

(1)「積極的にコミュニケーションを行う外国語活動」とは

コミュニケーションとは、課題解決に必要な情報を得るために、話し手と聞き手が互いに情報を送ったり受け取ったりするやりとりを通して、意見・情報を共有するなかで、共通認識を図っていく過程のことである。



〔図1：コミュニケーションとは〕

積極的にコミュニケーションを行うとは、子どもたちが活動に目的をもち、共通の目的をもつ他者に進んで働きかけながら、互いに情報を共有し、共通認識を図っていこうと

自分の情報を伝えたり、相手の情報を受け取ったりするために、慣れ親しんだ表現や語彙を使って、相手と意志疎通を図ることである。そのためには次の要素が必要となる。①慣れ親しんだ英語を用いて、伝えたいという意欲をもつこと（目的性）②活動の中で状況に応じて表現や語彙を選びながら使うこと（創造性）③活動を振り返り、コミュニケーションへの達成感をもつこと（有用性）である。

積極的にコミュニケーションを行う外国語活動とは、目的性・創造性・有用性を大切に、自分から他者に働きかけてコミュニケーションしていく外国語活動である。具体的に次のような子どもの姿を目指していく。

①目的性	目的意識をもち、共通の目的をもつ他者に自ら働きかけ、積極的に友達の考えを聞いたり自分の考えを話したりすること
②創造性	相手の言いたいことが何なのか考えたり、自分の伝えたいことを伝えるために慣れ親しんだ表現や語彙を使って、言語や非言語を組み合わせるなど思考して伝えること
③有用性	友達とコミュニケーションを図ることで、伝わったという達成感をもつとともに、言語や非言語で伝えるよさを実感したり、自分や友達のよさに気づくこと

3つの特性をそれぞれ独立してはぐくむのではなく、それぞれを関連づけて相互作用的にはぐくんでいくことが重要であると考え。相互作用的にはぐくむことで相乗効果が期待でき、次の活動への意欲の高まりにつながるからである。そのために、子どもが自分の伝えたことをもとに、どんな気づきや新しい発見があったのかを繰り返し認識できるような活動を展開する必要があると考える。

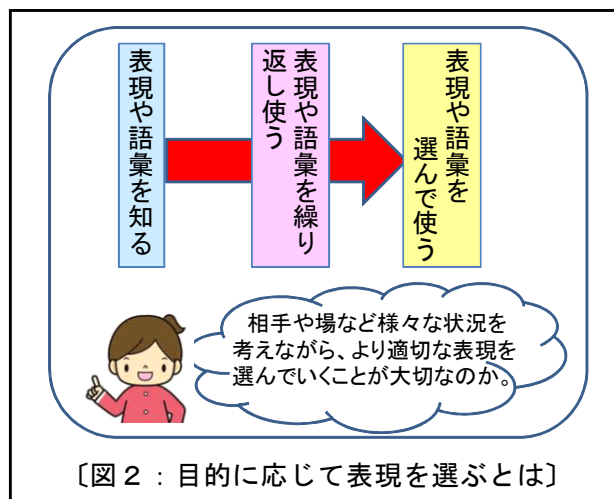
(2) 目的に応じて表現を選ぶ状況設定を通してとは

目的とは、単元での各段階における子どもが達成すべき課題のことであり、解決したいという強い動機がはたらくものである。その強い動機付けから、自分の行動に意味や意義をもち、目標がうまれる。その目的とは以下のように変容していく。

最初は、表現や語彙に慣れ親しみたい目的。次に、慣れ親しんだ表現や語彙を使って自分の成果物をつくりたい目的。最後に、友達と協力して違う状況でも成果物をつくりたい目的である。

目的に応じて表現を選ぶとは、子どもの達成要求に応じて、慣れ親しんだ表現や語彙を繰り返し使うとともに、自分の聞きたいこと・伝えたいことなど、その課題を達成するための情報を得るために選びながら使うことである。

目的に応じて表現を選ぶ状況設定とは、慣れ親しんだ表現や語彙を繰り返し使いながらも、課題に対して必要な表現や語彙を選びながら使ったり、相手や場など様々な状況を考えながら表現や語彙を選びながら使うことができるよう学習場面をつくることである。



これらの学習を展開するために、コミュニケーション活動において、「なれる」活動では興味関心を高める活動を、そして「使う」活動では、自分の力で課題を解決する活動へ、そして最後に「駆使する」活動では、課題解決に向けて友達と協力する状況へと段階的に変化させていく。学習の最初は子どもには目的はない。だから最初に興味関心をもつ外国の文化や言葉にふれさせ、「やってみたい」という目的をもたせる。そして最初に慣れ親しんだ表現を使って、「自分の力でやってみたい」という目的をもたせる。最後に自分が単元で培ったコミュニケーション能力を駆使して、「友達と一緒にやってみたい」という目的をもたせる。これらの活動を段階的に仕組み、課題解決を図ることにより自己理解から他者理解へと広がっていく考える。

この単元構成を、「目的性」「創造性」「有用性」の3つの特性を大切にしながら展開することで、コミュニケーションのよさをあじわうことができる外国語活動になるのではないかと考える。

(3) 具体的な方途

本研究では、外国語活動を通して積極的にコミュニケーションを図る子どもが育つために、共通の課題達成のための目標をもたせることや、単元全体及び1単位時間で行う段階的な活動構成の位置づけを行う。

① 興味・関心を高め目的を見いだすことができる教材化の工夫

子どもが意欲的に課題を追究していくためには、事象との出会いにより、自分の課題として認識し、切実な課題が生まれ、必然性のある強い目的意識をもたせることが重要である。その中で生じた意欲を原動力とし、コミュニケーションを図ることができるように考える。これらの点を考慮して以下の3点で教材化を行う。

ア 子どもたちの日常生活に身近なもの
イ 自分たちの意志・判断が課題解決に必要なもの
ウ コミュニケーションの足跡が見えるもの

以上3点で、興味・関心を高め目的を見出すことができるようにする。

② 目的に応じて状況設定を行う段階的な活動構成の工夫

単元全体を通して、子どもが積極的に友達とコミュニケーションを図ることができるように、「なれる・使う・駆使する」という段階的な活動構成を仕組む。

まず「なれる段階」では、その単元に必要な基本的な表現や語彙を明確にすることと単元の活動内容への見通しを明確にすることをねらう。単元で使用する表現や語彙を明確にすることは、子どもが今後の活動に見通しをもつことができるようになり、安心して活動できるようになると考える。また活動内容への見通しでは、日常の身近な場面や子どもの興味・関心のある事象を提示し、「面白そう」「やってみたい」「自分でもできそう」という意欲を喚起させることで、その単元の活動内容でコミュニケーションを図ろうとする動機づけを図るものである。次に「使う」段階では、「なれる段階」で慣れ親しんだ表現や語彙を使って課題に取り組み、自分のコミュニケーション能力に自信をもつことをねらう。「自分の力で表現できたな。」「相手に伝わってうれしいな」と感じさせる活動である。そのために、自力で課題解決できる教材を準備し、それをもとに友達とコミュニケーションを図る活動を仕組む。最後に「駆使する段階」では、使えるようになった表現や語彙を使いこなしながら友達と協力してコミュニケーションを図り、状況に応じて表現や語彙を選びながら使うことや自分の性格の再確認や友達によさに気づくことをねらう。「このときには、こっちの表現の方がいいかな。」「英語でも自分の考えていることを伝えることができるんだな。」「〇〇君と一緒に活動すると楽しいな。」「〇〇さんって、こんなところがあるんだ。」「僕は～ことができるんだな。」と感じさせる活動である。

	なれる段階	使う段階	駆使する段階
役割	単元に必要な基本的な表現や語彙を明確にすることと、単元の活動内容への見通しを明確にする。	慣れ親しんだ表現や語彙を使って課題に取り組み、コミュニケーションに自信をもつ。	使えるようになった表現や語彙を使いこなしながら友だちと協力してコミュニケーションを図り、伝え合うことのよさを理解する。
手立て	興味・関心をもつ外国の文化や言葉にふれさせる。	自力で課題解決できる教材の準備や振り返りシート	自分のよさや友だちのよさに気づくことができる振り返りシート

③ 自己理解や他者理解につながる評価活動の位置づけ

自己理解や他者理解を単元を通して感じることができるよう、評価活動を位置づける。それぞれ1単位時間の終末には、子どもの言葉のかけ合い、ワークシートへの記入、教師による評価を活動の目的に即して具体的な内容で行う。

4 研究の目標

外国語活動において、積極的にコミュニケーションを図る子どもが育つために、子どもが興味関心をもち、共通の目的意識をもって活動できるように、興味・関心を高め目的を見いだすことができる教材化の工夫、共通の目的をもつための段階的な活動構成の工夫、自己理解や他者理解につながる評価活動の位置づけの在り方を究明する。

5 研究仮説

外国語活動の学習指導において、課題解決にむけて自己理解や他者理解を設定する状況を仕組んだり、単元全体を通して行う段階的な活動構成と1単位時間で行う段階的な活動構成を行ったりすることで、積極的にコミュニケーションを行うことができるであろう。

[仮説実証のための着眼点]

- ① 興味・関心を高め目的を見いだすことができる教材化の工夫と目的に応じて状況設定を行う段階的な活動構成の工夫を行い、それぞれの段階で効果的な状況設定を行う。
- ② 児童の具体的な姿をとらえ、どう指導すればよいかを明確にするため、単元や各時間の目標に照らして評価規準を設定し、行動観察用のチェックリスト（指導者用）、振り返りカード（児童用）を作成する。

6 授業の計画

(1) 単元 「夢の一日を紹介しよう」 (Hi!Friends.2 Lesson 6)

(2) 単元の目標及び指導計画

	ねらい	主な活動	評価
1	○世界の子どもたちの生活を知る。 ○一日の活動の言い表し方を知り、ゲームを通して慣れ親しむ。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ 7 : 0 0 (It's seven) ・ 8 : 1 5 (It's eight fifteen) など </div>	【Warming up】 ・世界の子どもたちの生活について知る。 【Main activities】 ・時刻の言い表し方について知る。 ・時計を動かす、時刻を言い表すゲームをする。 目的の決定：理想の一日を作ろう。	●ALTの発音をしっかりと聞き取り、ゲーム活動に意欲的に取り組み、表現に慣れ親しむことができるか。 (外国語への慣れ親しみ)
2 本時	○一日の生活の言い表し方を知り、ゲームを通して慣れ親しむ。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ get up ・ eat breakfast ・ eat dinner ・ eat lunch ・ play basketball など </div>	【Warming up】 ・言い表し方の復習 ・♪チャンツ 【Main activities】【show and tell】 ・ゲーム活動を通して、自分の理想の生活を作り、表現する。	●ジェスチャー等を使って、積極的に自分の考えを伝えようとしているか。 (外国語への慣れ親しみ)
3	○理想の一日を作り、グループで	【Warming up】	●英語表現やジェスチャーを使っ

	伝える練習をする。 I get up at 10:00. I go to school at 12:00. I play game at 1:00. など	・ 言い表し方の復習 ・ ♪チャンツ 【Main activities】 ・ ペアで理想の一日を伝え合う	て、積極的に自分の考えを伝えようとしているか。 (外国語への慣れ親しみ)
4	○理想の一日を伝え合う。	【Warming up】 ・ ♪チャンツ ・ 理想の一日を伝える練習 【Main activities】 ・ 理想の一日をスピーチで伝える。 【show and tell】	●自分の理想の一日について、相手に伝わるように話そうとしているか。 (コミュニケーションへの関心・意欲・態度)
5	○世界の時差について知る。	【Warming up】 ・ ♪チャンツ 【Main activities】 ・ 世界の時差について知り、時刻を聞き取る。	●世界の子どもたちの生活を知り、自分の生活との違いに気づいているか。 (言語・文化に関する気づき)

7 指導の実際

	学習活動	教師の支援・援助	評価規準・評価方法
導 入	【Warming up】 (1) はじめのあいさつ (2) 時刻の言い表し方の復習 ・ 7 : 0 0 ・ 7 : 3 0 ・ 8 : 0 0 ・ 1 2 : 0 0 ・ 1 : 4 0 ・ 5 : 1 4	○ 温かい雰囲気の中でコミュニケーションを取ることができるように、笑顔で元気にあいさつを交わす。 ○ カードゲーム活動において、自分の考えを表すことができるように、時刻の言い表し方を復習をする。	
	Today's target 自分の理想の生活を言ってみよう。		
展 開	(4) 表現のチェック	○ 理想の一日を伝えることができるようにするために、児童の生活に関係の深い表現をチェックする。	
	・ get up ・ eat breakfast ・ eat dinner ・ eat lunch ・ play basketball ・ go to school ・ go to bed ・ study at home ・ study at school ・ watch TV ・ clean take a bath		
	【Main activities】 (5) ジェスチャーゲーム	○ 本時に使う表現を一人一人に多く発声させ、慣れ親しませるために、ジェ	◇ジェスチャーゲームで繰り返し表現を言っている

終末	<ul style="list-style-type: none"> ・ play tabletenis ・ play the piano ・ play game ・ go shopping ・ sing karaoke <p>を増やす。</p>	<p>スチャーゲームを行う。</p> <p>○ 児童が積極的に言い表し方を考え、表現しようとさせるために、既習で、児童とより関係の深い表現を交える。</p>	<p>か。(観察)</p>
	<p>(6) カードゲーム【show and tell】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 4人班で活動する。 ・ 友だちが引いたカードについて理想の時刻を組み合わせ、答える。 <p>・ ♪チャンツ</p>	<p>○ カードゲームのイメージをもたせるために、HIT と ALT がデモンストレーションを見せる。</p> <p>○ 児童が自分の知っている表現や言葉、ジェスチャーで伝えることができるように、黒板にはないカードも入れておく。</p>	<p>◇自分の理想の時刻と生活を組み合わせ、表現することができたか。</p> <p>(観察)</p> <p>(振り返りシート)</p>
<p>【Looking back】</p> <p>(6) 振り返り</p>	<p>○ 友だちと分かりやすくコミュニケーションをとることができるように、ポイントを確認する。</p> <p>○進んでコミュニケーションを取ろうとしている児童や、自分なりの伝え方ができていた児童、何度もゲームができていた班を賞賛する。</p>		

8 本時授業の結果と考察

導入の段階で、本時の流れを示すと共に「自分の理想の生活を紹介する」という本時のねらいを示した。このことにより、子どもたちは、課題を意識し、本時への学習意欲を高めていた。

展開の前半では、時刻を表す表現や“get up” “eat breakfast” “eat dinner” “eat lunch” “play basketball” “go to school” “go to bed” “study at home” “study at school” “watch TV” “clean take a bath” 等の表現に慣れるためにカードゲームをしたり、フラッシュカードを用いたり、ペアによるインタビュー活動をしたりして確認をした。

メインの活動では、show and tell の内容とそのとき使うの英語表現を一つずつ確認していった。ジェスチャーゲームをすることで、本時で必要な表現について慣れ親しむことができた。しかし、4人のグループ活動になり show and tell をしているとき、子ども達のコミュニケーションが画一的なものになっていた。この原因として、自分の理想の生活を紹介することが課題として捉えることができていなかったことが考えられる。コミュニケーションを行う必然性をもっともたせるために、自分ではなく、友だちの理想の生活をプロデュースする活動を仕組みれば良かったと考える。その一方で、日本語に頼らず英語を使って自信をもってコミュニケーションする姿が見られた。これは、なれる段階と使う段階における、英語表現に慣れ親しませる活動が功を奏したと考える。さらに、終末での子ども達の振り返りでは、「日本語で伝わらないときは、ジェスチャーを使って何とか伝えることができて自信がもてました。」「知っている言葉を考えながら伝えてみると、うまく伝

わったのでうれしかったです。」等の声が聞かれた。これらの言葉は本主題で目指す三つの特性でねらっている姿であり、その姿が具現化できたと考える。

9 成果と今後の課題

(1) 成果

- ① なれる段階、使う段階で使用表現に十分に慣れ親しませることで、コミュニケーションに自信をもたせることができた。
- ② 表現や語彙に慣れ親しませるためにチャンツや数々のゲームに取り組むことで、楽しみながら取り組むことができた。

(2) 課題

- ① 必然性のあるコミュニケーション活動の設定。コミュニケーションの前提となるインフォメーションギャップが子ども達の実態としてどのような状態か明確に把握し、活動を設定する必要がある。
- ② 表現や語彙の精選。外国語活動のねらいはコミュニケーションであることを再認識し、単元で用いる表現や語彙を精選することで、言葉の習得よりコミュニケーションに重点化できるようにする必要がある。

○ 参考文献

- 1 文部科学省 「小学校学習指導要領解説 外国語活動編」 東洋館出版社 平成 20 年
- 2 文部科学省 「中学校学習指導要領解説 外国語学習編」 ぎょうせい 平成 20 年
- 3 安彦 忠彦ほか 「現代学校教育大事典」 ぎょうせい 平成 14 年
- 4 林 忠幸 「体験的活動の理論と展開」 東信堂 平成 13 年
- 5 末田 清子・福田 浩子 共著 「コミュニケーション学」 松柏社 平成 15 年
- 6 金森 強 編著 「小学校の英語教育 指導者に求められる理論と実践」 教育出版 平成 15 年
- 7 大城 賢・直山 木綿子 編著 「学習指導要領の解説と展開」 教育出版 平成 20 年
- 8 波多野 誼余夫ほか 「コミュニケーションと思考」 岩波書店 平成 13 年
- 9 J.B.ベンジャミン 「コミュニケーション 話すこと・聞くことを中心に」 二瓶社 平成 4 年
- 10 樋口 忠彦ほか 編 「小学校英語教育への展開」 研究者 平成 22 年
- 11 樋口 忠彦ほか 編 「これからの小学校英語教育—理論と実践—」 研究社 平成 17 年
- 12 バトラー後藤 裕子 「日本の小学校英語を考える」 三省堂 平成 17 年